

幾何学特論第四講義資料 13

お知らせ

- 学部生の方、授業アンケートにご協力ください。科目番号 5170 です。

前回までの訂正

- 講義資料 12, 1 ページ 6 行目: $U, \dots, V \Rightarrow U, V$

13 正規直交枠

正規直交枠 次元 n のリーマン多様体 (M, g) 上の各点 p に対して, p の近傍 U と, U 上で定義された M の m 個ベクトル場 e_1, \dots, e_n で, 各 $q \in U$ に対して

$$\{e_1(q), \dots, e_n(q)\}$$

が $T_q M$ の正規直交基底を与えるようなものが存在する。

実際, 座標近傍 $(U; x^1, \dots, x^n)$ 上の基底ベクトル場 $(\partial_1, \dots, \partial_n)$ ($\partial_j = \partial/\partial x^j$) にグラム・シュミットの直交化を行えばよい。

このようなベクトル場の組 (e_1, \dots, e_n) を (M, g) の (局所的な) 正規直交枠という。

正規直交枠をひとつ固定したとき, U 上の n 個の 1 次微分形式 $\omega^1, \dots, \omega^n$ で

$$(13.1) \quad \omega^i(e_j) = \delta_j^i = \text{クロネッカーのデルタ}$$

となるものをとる。 $\{\omega^1, \dots, \omega^n\}$ を正規直交枠 $\{e_j\}$ の双対枠ということにする。

接続形式 リーマン多様体 (M, g) のリーマン接続を ∇ と書く。領域 U 上で定義された正規直交枠 $\{e_j\}$ が与えられたとき, ベクトル場 $X \in \mathfrak{X}(M)$ に対して

$$\nabla_X e_j = \sum_{k=1}^n \omega_j^k(X) e_k$$

とおくと, $\omega_j^k: \mathfrak{X}(U) \rightarrow \mathcal{F}(U)$ は U 上の 1 次微分形式を与える。実際, リーマン接続の性質から, 関数 $f \in \mathcal{F}(U)$ に対して

$$\nabla_{fX} e_j = f \nabla_X e_j = \sum_{k=1}^n (f \omega_j^k(X)) e_k$$

となるので, $\omega_j^k(fX) = f \omega_j^k(X)$ 。すなわち ω は U 上の $(0, 1)$ -テンソルを与えている。

この ω_i^j ($i, j = 1, \dots, n$) を, リーマン接続 ∇ の, 枠 $\{e_j\}$ に関する接続形式という。

補題 13.1. リーマン接続の正規直交枠 $\{e_j\}$ に関する接続形式 ω_j^k は

$$\omega_j^k = -\omega_k^j \quad (j, k = 1, \dots, n) \quad \text{とくに} \quad \omega_j^j = 0$$

を満たす.

証明: リーマン接続の性質と正規直交基底の性質から

$$\omega_j^k(X) = \langle \nabla_X e_j, e_k \rangle = X \langle e_j, e_k \rangle - \langle e_j, \nabla_X e_k \rangle = X \delta_{jk} - \omega_k^j(X) = \omega_k^j(X).$$

ただし δ_{jk} はクロネッカーのデルタ記号である.

とくに, 接続形式を並べることにより

$$(13.2) \quad \Omega = (\omega_j^i) : \mathfrak{so}(n) \text{ に値をとる } 1 \text{ 次微分形式}$$

が得られる. ただし $\mathfrak{so}(n)$ は n 次交代行列全体の集合, すなわち $SO(n)$ のリー環である. この Ω のことも接続形式ということがある. とくに

$$(13.3) \quad (De_1, \dots, De_n) = \left(\sum_{m=1}^n \omega_1^m e_m, \dots, \sum_{m=1}^n \omega_n^m e_m \right) = (e_1, \dots, e_n) \begin{pmatrix} \omega_1^1 & \dots & \omega_1^n \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \omega_n^1 & \dots & \omega_n^n \end{pmatrix} \\ = (e_1, \dots, e_n) \Omega$$

が成り立つ.

補題 13.2. リーマン接続の $\{e_j\}$ に関する接続形式を ω_j^k , $\{e_j\}$ の双対枠を ω^j とすると,

$$d\omega^j = - \sum_{k=1}^n \omega_k^j \wedge \omega^k = \sum_{k=1}^n \omega^k \wedge \omega_k^j$$

が成り立つ. ただし d は外微分である.

証明: 外微分 $d\omega^j$ は 2 次微分形式であることに注意すれば, 外微分の定義から,

$$\begin{aligned} d\omega^j(e_k, e_l) &= e_k(\omega^j(e_l)) - e_l(\omega^j(e_k)) - \omega^j([e_k, e_l]) \\ &= e_k \delta_l^j - e_l \delta_k^j - \omega^j(\nabla_{e_k} e_l - \nabla_{e_l} e_k) = \omega^j(\nabla_{e_k} e_l - \nabla_{e_l} e_k) \\ &= - \sum_{m=1}^n \omega^j(\omega_l^m(e_k) e_m - \omega_k^m(e_l) e_m) = -\omega_l^j(e_k) + \omega_k^j(e_l) \\ &= - \sum_{m=1}^n (\omega_m^j(e_k) \omega^m(e_l) - \omega_m^j(e_l) \omega^m(e_k)) = - \sum_{m=1}^n \omega_m^j \wedge \omega^m(e_k, e_l). \end{aligned}$$

ゲージ変換 リーマン多様体 (M, g) の領域 U 上で定義された正規直交枠 $\{e_j\}$ と, U 上の n 個のベクトル場の組 $\{a_1, \dots, a_n\}$ に対して, $\{a_j\}$ が正規直交枠であるための必要十分条件は

$$(13.4) \quad (a_1, \dots, a_n) = (e_1, \dots, e_n) A \quad (A: U \rightarrow O(n) \text{ は } C^\infty\text{-級})$$

なる写像 A が存在することである. ただし $O(n)$ は n 次直交代行列全体がなすリー群である. とくに式 (13.4) の A が $SO(n)$ に値をとるとき, $\{a_j\}$ と $\{e_j\}$ は同じ向きを定める.

補題 13.3. 正規直交枠 $\{e_j\}$ に関する接続形式 Ω と, (13.4) で与えられる枠 $\{a_j\}$ に関する接続形式 $\tilde{\Omega}$ の間には,

$$\tilde{\Omega} = A^{-1}\Omega A + A^{-1}dA$$

なる関係がある.

証明: 式 (13.3) より

$$\begin{aligned} D(\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n) &= (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)\tilde{\Omega} \\ D(\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n) &= D((e_1, \dots, e_n)A) \\ &= D((e_1, \dots, e_n))A + (e_1, \dots, e_n)dA = (e_1, \dots, e_n)\Omega A + (e_1, \dots, e_n)dA \\ &= (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)A^{-1}\Omega A + (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)A^{-1}dA = (\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)(A^{-1}\Omega A + A^{-1}dA) \end{aligned}$$

曲率形式 リーマン接続の接続形式 $\Omega = (\omega_i^j)$ に対して

$$(13.5) \quad \Gamma := d\Omega + \Omega \wedge \Omega = \left(d\omega_i^j + \sum_{m=1}^n \omega_i^m \wedge \omega_m^j \right)$$

で与えられる $so(n)$ に値をとる 2 次微分形式を, 接続 ∇ の曲率形式という.

補題 13.4. 式 (13.5) で与えられた曲率形式 $\Gamma = (\Gamma_j^k)$ は

$$R(e_i, e_j)e_k = \sum_{m=1}^n \Gamma_k^m(e_i, e_j)e_m = \sum_{l=1}^n (d\omega_k^l + \sum_{s=1}^n \omega_k^s \wedge \omega_s^l)(e_i, e_j)e_l$$

を満たす.

系 13.5. リーマン多様体 (M, g) の断面曲率が一定で, その値が k となるための必要十分条件は

$$\langle \Gamma_k^l(e_i, e_j), e_l \rangle = k(\delta_{jl}e_i - \delta_{il}e_j)$$

となることである. ただし (Γ_k^l) は Ω の曲率形式, $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は g が与える内積である.

証明: 断面曲率が一定値 k を持つための必要十分条件は

$$R(X, Y)Z = k(\langle Y, Z \rangle Z - \langle X, Z \rangle Y)$$

を満たすことである.

系 13.6. リーマン多様体 (M, g) の各点の近傍 U と U 上の正規直交枠で, 対応する接続形式が恒等的に 0 となるものが存在するための必要条件は (M, g) が平坦, すなわち曲率テンソルが恒等的に 0 になることである.

証明: まず正規直交枠 $\{e_j\}$ とその接続形式 Ω をとり, (13.4) のような正規直交枠 $\{a_j\}$ の接続形式が

$$\tilde{\Omega} = A^{-1}dA + A^{-1}\Omega A = 0$$

となるような行列値関数 $\Omega: U \rightarrow SO(n)$ を見つければよい. これは $dA + \Omega A = 0$ という A に関する線形微分方程式だが, その適合条件は $\Gamma = 0$ となることである. とくに Ω は $so(n)$ に値をとる微分形式だから, 単連結領域 U 上では方程式 $dA + \Omega A = 0$ は $SO(n)$ に値をとるような解 A をもつ.

平坦なリーマン多様体

定理 13.7. 平坦な n 次元リーマン多様体 (M, g) の単連結領域 U に対して, 等長写像 $f: U \rightarrow \mathbf{R}^n$ が存在する. ただし \mathbf{R}^n にはユークリッド計量が与えられているものとする.

証明: 簡単のため U 上の正規直交枠 $\{e_j\}$ をとることができるものとしておく. このとき, $F: U \rightarrow \text{SO}(n)$ で

$$dF = F\Omega$$

となるものが存在する. ただし Ω はリーマン接続の接続形式である. このようにして得られた $F = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n)$ (\mathbf{u}_j は U 上の \mathbf{R}^n 値関数) に対して, \mathbf{R}^n 値 1 次微分形式を

$$\alpha := \mathbf{u}_1\omega^1 + \dots + \mathbf{u}_n\omega^n$$

と定める. ただし $\{\omega^j\}$ は $\{\text{vect}e_j\}$ の双対枠である. すると α は閉形式となるので $df = \alpha$ をみたす $f: U \rightarrow \mathbf{R}^n$ が存在する. これが求めるものである.

問題

- 13-1 補題 13.4 の証明を与えなさい (曲率テンソル, 接続形式の定義式を書いていけばわかる).
- 13-2 系 13.6 の証明を完成させなさい.
- 13-3 定理 13.7 の証明を完成させなさい.